

少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（Ⅱ）

—北海道内老人デイサービスセンターにおけるレクリエーションと博物館利用に関するアンケートの解析から—

青柳かつら

Key Words

高齢者 (Senior citizens)、老人デイサービスセンター (Elderly day service centers)、レクリエーション (Recreation)、博物館 (Museum)、アンケート (Questionnaire)

1 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

社会の高齢化が進展し、高齢者は博物館⁽¹⁾の主要ユーザーになりつつある。筆者は、北海道において、多くの博物館が、高齢者を展示や教育普及事業のターゲットと認識しているものの、これら事業における高齢者への訴求力や企画力が弱いこと、高齢者利用の多寡においては層の分化が見られること、高齢者対象の活動プログラムの企画力が弱いことなどを明らかにした (青柳 2016)。

北海道では、今後大幅な人口減と高齢化の進行が予想される。すなわち2045年に推計人口は、約 400万人 (2015年時の-25.6%) となり、道内全179市町村で2015年より減少し、高齢化率は42.8%に達する (国立社会保障・人口問題研究所 2018)。博物館は、増大する高齢者のニーズの把握を行い、その知見を高齢者受け入れのノウハウとして共有して、館運営や活動プログラムの企画に役立てていくことが重要である。

本研究では、福祉施設や介護サービスを利用する高齢者⁽²⁾のレクリエーションに着目する。高齢者の要介護者数は急速に増加しており、65歳以上で介護保険制度における要介護、要支援の認定を受けた人は、2007年度 (437.8万人) から2016年度 (618.7万人) で180.9万人増加した (内閣府 2019a)。今後、高齢化率の上昇とともに、この数値は一層増加することが予想できる。多様な介護・介護予防のあり方に配慮しつつ、施設系・通所系サービスを利用する高齢者にレクリエーションの場を提供できれば、博物館の新たな役割発揮につながる。

福祉や介護のサービスで提供されるレクリエーションは、「福祉レクリエーション」と呼ばれる。「幸福の追及」 (川廷 2003) という広汎な概念に、利用者のQOL

(生活の質)の向上や生活と心身の活性化 (廣池 2003) などが織り込まれたものである。介護福祉士養成校では、「レクリエーション活動援助法」という科目があり、福祉や介護の現場では、その活動援助が重要になっている。

一方で、博物館では、2000年代以降、高齢者の回想法の場としての活用が目ざされ始め、回想法プログラムが高齢者にもたらす、認知機能やQOLの向上、BPSD⁽³⁾の軽減、そして介護予防などといった効果が報告されてきた (例えば、野村 2011a、奥村 2011、北名古屋市 2013)。今後、博物館は、こうした切り口から、福祉レクリエーションの受け皿の1つとなり、高齢者のQOLの向上や心身の健康維持に貢献できる可能性がある。

以上の着眼から、本研究では、高齢者を利用者とする福祉施設 (以下、高齢者施設) による博物館利用に注目し、①サービスの一環としてレクリエーションを提供していること、②介護度が比較的軽い利用者が多く、道内博物館における高齢者団体利用の主体としては、高齢者施設の中で最多である (青柳 2016) ことから、研究の対象として、老人デイサービスセンターに焦点をあてた。

本研究の目的は、①老人デイサービスセンターの日頃のレクリエーションの特徴や実施上の課題を把握すること、②老人デイサービスセンターの博物館の利用状況と評価、博物館への要望等を明らかにすること、③①～②のデータをもとに、博物館利用に対して異なる層の特徴を明らかにすることである。

これらの解明には、超高齢社会における博物館の役割発揮を具現化する観点から、博物館とその利用主体である老人デイサービスセンターとの適切なマッチングを促進し、博物館における高齢者対象のプログラム、教材等のコンテンツ開発のヒントを得るという意義がある。このことは、介護人材の不足が進行する⁽⁴⁾中、高齢者施設をはじめとする高齢者福祉・介護の関係者のみならず、

地域が連携して高齢者のレクリエーションを支え、福祉レクリエーションの選択の幅を広げることにつながる。

(2) 研究の方法

1) 事例調査

まず、本研究は、道内博物館対象のアンケート調査結果（青柳 2016）に立脚している。ここでは、年間の入場者数における高齢者の比率が30%以上である博物館は35.2%と多数を占める、高齢者団体の入場において、高齢者施設の中では老人デイサービスセンターが最多であるといった知見を得た。

そこで、これらの量的把握の成果を質的にも把握し、本研究の課題設定の妥当性を確認するため、北海道博物館を事例に「高齢者の入場者数」、「老人デイサービスセンターの入場数」、そしてこれらのシェアを明らかにする予備調査を行った。北海道博物館は、道内の中核的博物館であり、入場者数が比較的多く、高齢者及び高齢者団体の利用、入場者・入場団体属性がともに多様であることが予想される。

以上を踏まえ、研究開始時の最新データであった2017年度の同館総合展示入場者数、同入場団体数から、高齢者（65歳以上）の人数、老人デイサービスセンターの入場数、これらの全体に占める比率を調べた。

2) アンケート調査

2019年1月中旬～2月中旬、石狩地域、上川・留萌・宗谷地域に所在する老人デイサービスセンター（通所介護事業所と地域密着型通所介護事業所⁽⁶⁾、以下、双方を合わせて「事業所」と呼ぶ）のレクリエーション（以下、レク）担当職員600名を対象に郵送法アンケート調査を行った。対象事業所の住所リストは、北海道保健福祉部施設運営指導課ホームページ掲載「介護保険サービス事

業所（2018年8月31日現在）」を使用した。質問項目は、前節の研究目的を踏まえて、計22問を設定した（表1）。質問紙発送から約2週間後、回収率を高める目的で、調査協力へのお礼と回収の締切日を確認するはがきを郵送した。

分析は以下の4つを実施した。

a. 道内2地域での比較

「石狩」、「上川・留萌・宗谷」の2地域の差違を把握するため、 χ^2 検定と残差分析によって各回答における比率の差を比較した。クロス表において、期待度数が1以下のセルがあった場合、および期待度数5以下のセルが全セルの20%以上あった場合は、イエーツの補正を行った。実数での回答を得た、「職員数」と「うち介護職員数」については、 t 検定によって、平均値の差を比較した。

b. 高齢見学者の意向との比較

事業所を利用する高齢者と健康な高齢者の意向の相違を把握するため、博物館利用上の問題点（表1-3）について、本調査結果と、60歳以上の高齢者であり実際に博物館へ来館した見学者への調査結果（（財）日本博物館協会 2007）との比率を比較した。なお本項目は、後述のように調査の条件に相違があるため、統計解析は行わず、傾向を把握するに留めた。

c. 博物館職員の意向との比較

博物館における高齢者対象のサービスについて、老人デイサービスセンターと博物館職員（青柳 2016）の意向の相違を把握するため、共通の質問（表1-4）について、 χ^2 検定と残差分析によって各回答における比率の差を比較した。

表1 アンケート調査質問項目

分類	項目		
	老人デイサービスセンター職員	老人デイサービスセンター職員/ 高齢見学者共通	老人デイサービスセンター職員/ 博物館職員共通
1 事業所の基本的属性	所在地域、設置主体、職員数、うち介護職員数、利用者の年齢、介護程度、回答者の職種、回答者のレクでの役割		
2 レクについて	実施しているレク、レクの実施上、重視していること、レクの効果、レクの効果が得られているか、レクは活発か、レクを行う上での問題点		
3 博物館の利用	博物館での回想法プログラムの既知有無、レクにおける外出の頻度、レクで利用したことのある博物館、今後、博物館に行ってほしいサービス		
4 超高齢社会での博物館の役割	博物館利用上の問題点 高齢者が魅力を感じる展示、博物館が果たす役割		

d. 博物館利用等に影響を及ぼす項目の把握

本調査で得られた各事業所の属性やレク担当者の意向のデータをもとに、数量化Ⅱ類を用いて、博物館の利用有無と利用プログラムへの理解有無に影響を及ぼし、これらが異なる層を特徴づける項目を調べた。

2 事例調査結果：北海道博物館の高齢者利用

まず、2017年度の北海道博物館総合展示入場者数において、「高齢者（65歳以上）」は11,305人（14.0%）であった。高齢者は、「一般（33.8%）」、「小学生（21.0%）」に次ぐ主要な入場者層の1つであった（表2）。

道内市町村における高齢化の進行度合いの差異もあり、同館の年間の総合展示入場者数における高齢者の比率は、30%（青柳 2016）には及ばなかった。しかし、同館が所在する札幌市（26.8%）、隣接する江別市（30.0%）、北広島市（31.4%）の2019年1月1日現在の高齢化率（北海道保健福祉部高齢者支援局高齢者保健福祉課 2019）を勘案すると、今後、同市の高齢化率上昇の影響も受けながら、高齢者の入場者数が拡大することが予想できた。

次に、2017年度と同館総合展示への入場団体数（入場した延べ団体数）において、高齢者が成員の過半数である、「高齢者主体」の一般団体は82（9.9%）、高齢者施設の「通所系サービス利用者」は89（10.7%）、「施設系サービス利用者」は35（4.2%）だった。この3者を合計した、「高齢者団体」の入場数は、206（24.8%）で、学校団体（34.4%）に次ぐ多数を占めた（表3）。

そして、通所系サービス利用者と施設系サービス利用者を合計した、「高齢者施設」の入場数は124（全体の15.0%、高齢者団体の60.2%）となった（表3）。すなわち、入場団体数において、成員の過半数が健康な高齢者と思われる「高齢者主体の一般団体による利用」と「高

齢者施設による利用」との比率は概ね4:6となり、後者が前者を上回っていることが明らかになった。

なお、通所系サービスには、老人デイサービスセンターのほか、施設系サービスに加えて通所介護事業を行ったり、通所を中心に、宿泊、訪問の介護サービスを組み合わせて提供したりする高齢者施設が含まれる。そこで内訳を精査したところ、「老人デイサービスセンター」は67（全体の8.1%、福祉団体の25.2%、高齢者団体の32.5%）となり、福祉団体および高齢者団体において最大の主体だった。

以上より、既述の道内博物館でのアンケート調査結果（青柳 2016）を、事例調査から再把握でき、博物館において高齢者が主要な入場者となっていること、高齢者の団体利用においては、老人デイサービスセンターによる利用が多数となっていることが確認できた。

3 アンケート調査結果

質問紙発送の結果、営業停止等による未到達返しが12生じた。有効な発送数588に対して218の回収が得られ（回収率37.1%）、有効回答は208（有効回答率35.4%）だった。有効回答208の内訳は、通所介護事業所103と地域密着型通所介護事業所105だった。有効回答には、石狩、上川・留萌・宗谷の2地域に、この2つの施設種がほぼ1:1の比率で含まれており⁶⁾、施設種の偏りのない回答を得ることができた。

(1) 事業所の基本的属性

1) 所在地域

所在地域については、「札幌市」、「旭川市」、「これらを除く市町村」を区分とした。石狩では、「札幌市」が地域内で最多72.4%を占め、上川・留萌・宗谷では、「旭川市」が地域内で最多55.6%を占めた。全体では、

表2 北海道博物館の総合展示入場者数（2017年度）

区分	人数	比率 (%)
一般	27,212	33.8
小学生	16,937	21.0
中学生	3,608	4.5
高校生	3,647	4.5
大学生	3,663	4.5
高齢者	11,305	14.0
心障者	1,927	2.4
視察者・その他	12,220	15.2
計	80,519	100.0

注1) 同館指定管理者による集計結果を再計算した。

注2) 学生・心障者を除く、区分の意味は以下の通りである。

一般：大学生・65歳以上を除く成人

高齢者：65歳以上

視察者・その他：視察者、乳幼児、その他の無料入場者

表3 北海道博物館の総合展示への入場団体数（2017年度）

区分	団体数	比率 (%)
学校団体	285	34.4
一般団体	188	22.7
高齢者主体a	82	9.9
その他	106	12.8
福祉団体	266	32.1
(高齢者施設)		
通所系サービス利用者b	89	10.7
施設系サービス利用者c	35	4.2
その他	142	17.1
視察団体・その他	90	10.9
計	829	100.0
高齢者団体a+b+c	206	24.8

注1) 同館広聴業務資料を、高齢者利用を観点に再計算した。

注2) 高齢者主体aは、一般団体のうち65歳以上が成員の過半数を占める団体を指す。

「札幌市」が最多50.5%を占めた（表4）。

2) 設置主体

設置主体については、石狩（42.1%）、上川・留萌・宗谷（34.9%）とも、「株式会社」が最多だった。全体でも、「株式会社」が最多39.9%を占めた。「社会福祉協議会以外の社会福祉法人」は次いで多いものの、全体で21.6%にとどまった。「有限会社」も合わせると、民間の営利団体が全体で49.0%と多数を占めた（表5）。近年、道内のデイサービス事業所において「社会福祉協議会以外の社会福祉法人」と「株式会社」とが逆転する傾向（北海道デイサービスセンター協議会 2017）が、本調査でも確認できた。

両地域の回答区分の分布には有意差が見られ（ $p<0.05$ ）、石狩は上川・留萌・宗谷よりも「市町村」の比率が低くなった（ $p<0.05$ ）（表5）。

表4 所在地域

地域	回答数	地域内比率 (%)	全体比率 (%)
石狩 札幌市	105	72.4	50.5
札幌市を除く市町村	40	27.6	19.2
小計	145	100.0	-
上川 旭川市	35	55.6	16.8
旭川市を除く市町村	20	31.7	9.6
留萌	2	3.2	1.0
宗谷	6	9.5	2.9
小計	63	100.0	-
総計	208	-	100.0

表5 設置主体

地域区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
株式	61	42.1	22	34.9	83	39.9
社協以外の社福	27	18.6	18	28.6	45	21.6
有限	13	9.0	6	9.5	19	9.1
市町村*	6	4.1	8	12.7	14	6.7
医療	11	7.6	1	1.6	12	5.8
NPO	4	2.8	3	4.8	7	3.4
社協	3	2.1	4	6.3	7	3.4
財団	2	1.4	0	0.0	2	1.0
社団	1	0.7	0	0.0	1	0.5
農協	0	0.0	0	0.0	0	0.0
生協	0	0.0	0	0.0	0	0.0
宗教	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	10	6.9	1	1.6	11	5.3
無回答	7	4.8	0	0.0	7	3.4
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

注1) χ^2 検定により回答区分の分布は地域区分で異なる（ $p<0.05$ ）。
注2) 残差分析により地域区分で差がある（*： $p<0.05$ ）。

3) 職員数

職員数（常勤換算人数）については、石狩では、「6～7人未満」と「10～15人未満」が最多各13.8%を占め、次いで「3～4人未満」と「4～5人未満」（各11.7%）が多数を占めた。上川・留萌・宗谷では、「5～6人未満」が最多17.5%を占めた。全体では、「10～15人未満（13.0%）」、「4～5人未満（12.5%）」、「6～7人未満（12.0%）」が僅差で多数を占めた。「3～4人未満」から「8～9人未満」は各10%前後であり、度数分布において、比率が突出する階級はなかったことから、職員数は事業所によってばらつきがあると思われた（表6）。

両地域の回答区分の分布には有意差が見られ（ $p<0.05$ ）、石狩は上川・留萌・宗谷よりも「5～6人未満」の比率が低くなった（ $p<0.01$ ）（表6）。平均値は、石狩では7.5人、上川・留萌・宗谷では6.8人、全体では

表6 職員数

地域区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
0～1人未満	1	0.7	0	0.0	1	0.5
1～2人未満	1	0.7	0	0.0	1	0.5
2～3人未満	6	4.1	5	7.9	11	5.3
3～4人未満	17	11.7	3	4.8	20	9.6
4～5人未満	17	11.7	9	14.3	26	12.5
5～6人未満**	6	4.1	11	17.5	17	8.2
6～7人未満	20	13.8	5	7.9	25	12.0
7～8人未満	10	6.9	8	12.7	18	8.7
8～9人未満	14	9.7	8	12.7	22	10.6
9～10人未満	6	4.1	3	4.8	9	4.3
10～15人未満	20	13.8	7	11.1	27	13.0
15人以上	12	8.3	2	3.2	14	6.7
無回答	15	10.3	2	3.2	17	8.2
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

注1) χ^2 検定により回答区分の分布は地域区分で異なる（ $p<0.05$ ）。
注2) 残差分析により地域区分で差がある（**： $p<0.01$ ）。

表7 うち介護職員数

地域区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
0～1人未満	2	1.4	1	1.6	3	1.4
1～2人未満	7	4.8	7	11.1	14	6.7
2～3人未満	22	15.2	9	14.3	31	14.9
3～4人未満	24	16.6	10	15.9	34	16.3
4～5人未満	20	13.8	16	25.4	36	17.3
5～6人未満	13	9.0	5	7.9	18	8.7
6～7人未満	16	11.0	3	4.8	19	9.1
7～8人未満	7	4.8	1	1.6	8	3.8
8～9人未満	3	2.1	5	7.9	8	3.8
9～10人未満	9	6.2	0	0.0	9	4.3
10～11人未満	2	1.4	1	1.6	3	1.4
11人以上	5	3.4	2	3.2	7	3.4
無回答	15	10.3	3	4.8	18	8.7
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

7.2人だった。度数分布では、上川・留萌・宗谷は、石狩よりも、多人数の階級においても該当比率が高い傾向が見られたものの、「5～6人未満」区分以外の階級と、平均値には有意な差はなく、両者の職員数に差異はないと考えられた。

さらに職員数のうち、介護職員数（常勤換算人数）については、石狩では、「3～4人未満（16.6%）」と「2～3人未満（15.2%）」が僅差で多数を占め、上川・留萌・宗谷では、「4～5人未満」が最多25.4%を占めた。全体では、「4～5人未満（17.3%）」と「3～4人未満（16.3%）」が僅差で多数を占めた（表7）。「2～3人未満」から「6～7人未満」にゆるやかな集中がみられたが、度数分布において、職員数と同様に、比率が突出する階級はなく、介護職員数は事業所によってばらつきがあると思われた。

平均値は、石狩では4.7人、上川・留萌・宗谷では4.3人、全体では4.6人だった。職員数と同様、両者の介護職員数に差異はないと考えられた。

4) 利用者の属性

まず、利用者の年齢については、石狩（90.3%）、上川・留萌・宗谷（85.7%）とも、「75歳以上が多い」が最多だった。全体でも、「75歳以上が多い」が最多88.9%を占めた（表8）。

近年、後期高齢者である75歳以上人口は増加してお

表8 利用者の年齢

地域区分 回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
65-74歳が多い	4	2.8	1	1.6	5	2.4
75歳以上が多い	131	90.3	54	85.7	185	88.9
どちらともいえない	4	2.8	5	7.9	9	4.3
その他	4	2.8	0	0.0	4	1.9
無回答	2	1.4	3	4.8	5	2.4
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

表9 介護程度

地域区分 回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
チェックリスト該当者が多い（追加項目）	1	0.7	2	3.2	3	1.4
要支援1～2が多い	11	7.6	11	17.5	22	10.6
要介護1～2が多い（軽度要介護者）	96	66.2	37	58.7	133	63.9
要介護3が多い（中度要介護者）	10	6.9	0	0.0	10	4.8
要介護4～5が多い（重度要介護者）	1	0.7	1	1.6	2	1.0
いずれともいえない	8	5.5	3	4.8	11	5.3
その他	15	10.3	7	11.1	22	10.6
無回答	3	2.1	2	3.2	5	2.4
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

り、2018年には1,798万人と、前期高齢者である65～74歳人口（1,760万人）を初めて上回った（内閣府2019b）。さらに75歳以上になると要介護、要支援の認定を受ける人の割合は大きく上昇する（内閣府2019a）。これらは、本アンケート調査の対象事業所の利用者においても、「75歳以上が多い」が圧倒的多数を占めた実態につながっていた。

そして、利用者の介護程度については、石狩（66.2%）、上川・留萌・宗谷（58.7%）とも、「要介護1～2が多い（軽度要介護者）」が最多だった。全体でも、「要介護1～2が多い」が最多63.9%を占めた。他方で、「いずれともいえない」、「その他」は全体で計15.9%と比較的多数を占め（表9）、多数者が該当する介護程度が明確ではない、すなわち介護程度にばらつきのある事業所も多いことが明らかになった。

5) 回答者の属性

まず、回答者の職種については、石狩（47.6%）、上川・留萌・宗谷（60.3%）とも、「生活相談員」が最多だった。全体でも、「生活相談員」が最多51.4%を占めた。「その他」は全体で23.6%と比較的多数であったが、この多くは「管理者」であった（表10）。

両者の回答区分の分布には有意差が見られ（ $p<0.05$ ）、石狩は上川・留萌・宗谷よりも「看護職員」の比率が低く、「その他」の比率が高くなっていた（ $p<0.05$ ）（表10）。

特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護療養型医療施設においては、レクの担当者は介護職員が中心となり、看護職員らとの連携によって、企画運営する実態が報告されている（原田ら2008）。また、老人デイサービスセンターにおいても、レクの計画から実施に携わり、活動計画と活動援助の中心を担うのは介護職員が最多であるとの報告がある（森山・土井2009）。

しかし今回、道内2地域の同事業所においては、生活相談員が、介護職員を大きく上回る比率で、レクの主担

表10 回答者の職種[複数回答可]

地域区分 回答区分	石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
生活相談員	69	47.6	38	60.3	107	51.4
介護職員	40	27.6	13	20.6	53	25.5
機能訓練指導員	5	3.4	3	4.8	8	3.8
看護職員*	2	1.4	4	6.3	6	2.9
その他*	41	28.3	8	12.7	49	23.6

注1) 回答総数は、石狩157、上川・留萌・宗谷66、全体223である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩1.1、上川・留萌・宗谷1.0、全体1.1である。
注2) χ^2 検定により回答区分の分布は地域区分で異なる（ $p<0.05$ ）。
注3) 残差分析により地域区分で差がある（*： $p<0.05$ ）。

当を務めていることが明らかになった。

次に、回答者のレクでの役割については、石狩（77.2%）、上川・留萌・宗谷（73.0%）とも、「企画」が最多だった。全体でも、「企画」が最多76.0%を占め、次いで「実施上の観察（69.2%）」、「プログラムの運営・進行（61.5%）」も多数だった。他方、「健康状態チェック（28.4%）」、「プログラムの評価（36.5%）」は全体で40%未満に留まった。1事業所あたりの選択肢回答数は、全体で平均4.3個だった（表11）。

以上より、事業所内のレク担当者には、「企画」を筆頭に多数の役割があることが明らかになった。そして、「健康状態チェック」、「プログラムの評価」については、看護職員等の他職員とも連携して、実施されていると考えられた。一方で、「企画（76.0%）」と「評価（36.5%）」の比率の差異が大きいことは、「アセスメントー計画ー実施ー評価ー再アセスメント」という、レクの活動援助の一連のサイクル（A-PIEプロセス）（滝口 2007）において、評価がそもそも不在であったり、レクの企画者が評価に関わっておらず、このサイクルが十分機能していないという、レクの活動援助に余裕のない実態も示唆された。

(2) レクについて

1) 実施しているレク

実施しているレクについては、石狩（84.8%）、上川・留萌・宗谷（88.9%）とも、「体操・ストレッチ」が最多だった。全体でも、「体操・ストレッチ」が最多86.1%を占めた。

照井ら（2006）、黒白（2014）等を参考にした区分別では、全体で、「余暇活動的レク」では、「体操・ストレッチ」、次いで「事業所内の年中行事（77.9%）」が多数であり、「予防的レク」では、「大人のぬり絵（71.2%）」、「クイズ・言葉遊び（70.2%）」が僅差で多数だった。

これらは比率が70%を超えており、事業所で一般的に実施されているレクであると考えられた。「専門的レク」では、「回想法（24.5%）」が全体で最多だったが、他区分の最多の回答と比べて該当比率が低く、実施は一般的ではないと思われた。

「博物館などの見学（28.8%）」は、「外食・買い物（58.7%）」、「散歩・ドライブ（56.7%）」といった他種の外出を伴うレクと比べて少数であったものの、全体で30%弱を占めた（表12）。

2) レクで重視していること

レクで重視していることについては、両地域とも、「なるべく全員が参加できる内容であること（石狩68.3%、上川・留萌・宗谷77.8%）」と「利用者の日常生活

表12 実施しているレク[複数回答可]

回答区分	石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
体操・ストレッチ	123	84.8	56	88.9	179	86.1
事業所内の年中行事	114	78.6	48	76.2	162	77.9
風船・ボール等のゲーム	97	66.9	45	71.4	142	68.3
楽器演奏・カラオケ・歌	98	67.6	37	58.7	135	64.9
手工芸・ものづくり	95	65.5	34	54.0	129	62.0
外食・買い物	86	59.3	36	57.1	122	58.7
散歩・ドライブ	82	56.6	36	57.1	118	56.7
絵画・陶芸・貼り絵	71	49.0	33	52.4	104	50.0
習字・生け花	55	37.9	20	31.7	75	36.1
幼児・児童との交流	52	35.9	15	23.8	67	32.2
博物館などの見学	40	27.6	20	31.7	60	28.8
映画・ビデオ鑑賞	42	29.0	13	20.6	55	26.4
大人のぬり絵	105	72.4	43	68.3	148	71.2
クイズ・言葉遊び	103	71.0	43	68.3	146	70.2
脳と身体を使うゲーム	96	66.2	47	74.6	143	68.8
将棋・麻雀・トランプ	101	69.7	41	65.1	142	68.3
折り紙・昔の玩具	95	65.5	41	65.1	136	65.4
調理・清掃・家事	56	38.6	23	36.5	79	38.0
読書・音読	47	32.4	20	31.7	67	32.2
音楽鑑賞・コンサート	47	32.4	8	12.7	55	26.4
農作業・園芸	47	32.4	8	12.7	55	26.4
地域の行事	15	10.3	10	15.9	25	12.0
おしゃれ・化粧	20	13.8	3	4.8	23	11.1
回想法	40	27.6	11	17.5	51	24.5
マッサージ	33	22.8	16	25.4	49	23.6
俳句・和歌・川柳	14	9.7	7	11.1	21	10.1
動物セラピー	10	6.9	4	6.3	14	6.7
ダンス・舞踊	8	5.5	4	6.3	12	5.8
その他	18	12.4	2	3.2	20	9.6

表11 レクでの役割[複数回答可]

回答区分	石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
企画	112	77.2	46	73.0	158	76.0
実施中の観察	100	69.0	44	69.8	144	69.2
プログラムの運営・進行	89	61.4	39	61.9	128	61.5
物品準備	86	59.3	36	57.1	122	58.7
移動介助	86	59.3	32	50.8	118	56.7
後片付け	67	46.2	25	39.7	92	44.2
プログラムの評価	55	37.9	21	33.3	76	36.5
健康状態チェック	41	28.3	18	28.6	59	28.4
その他	5	3.4	0	0.0	5	2.4

注) 回答総数は、石狩641、上川・留萌・宗谷261、全体902である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩4.4、上川・留萌・宗谷4.1、全体4.3である。

注1) 選択肢と区分は、照井ら（2006）、黒白（2014）によるアクティビティケアの分類と回答結果、士別市いきいき健康センターにおける2018年度の福祉レク・プログラム（士別市業務資料）を参考に設定した。
注2) 回答総数は、石狩1810、上川・留萌・宗谷724、全体2534である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩12.5、上川・留萌・宗谷11.5、全体12.2である。

動作能力（ADL）の違いや『できる力』に合っていること（石狩67.6%、上川・留萌・宗谷74.6%）」が多数を占めた。全体でも、この2者が、それぞれ71.2%、69.7%と僅差で多数だった（表13）。この2者は相反する内容であり、レク担当者には、同一のプログラムを、個人の状況に合わせて参加の仕方を変えて支援するという、高い調整能力が求められていると思われた。

老人デイサービスセンターを含む、全国の高齢者施設のレクについて調査した森山・土井（2009）が重要性を指摘した、「個別援助計画に基づいていること（44.2%）」は全体で半数未満だった。彼らの調査結果において、自由記載で回答（質的に把握）された、「なるべく全員が参加できる内容であること」、「利用者のADLの違いや『できる力』に合っていること」、そして事業所の実態に照らした「コストや手間に無理がなく、施設的环境に合っており、持続可能であること（58.7%）」などは、この「個別援助計画に基づいていること」の比率を上回っていた。

すなわち、今回の量的把握によって、多数の事業所では、利用者の個々の状況への配慮（個別の対応）と共に、「なるべく全員が参加できる」といった共時性や共同性、レク運営上の効率性や持続性が重視されている実態が明

らかになった。

そして森山・土井（2009）が同様に重要性を指摘した、「スタッフ自身も楽しみながら実施できること（51.4%）」はこれらに次ぎ多数で、過半数だった。レクの実施においては、楽しい雰囲気づくりや共感性、運営の持続性の一要素として、活動援助者側の楽しさも重視されていると思われた。

3) レクの効果

レクの効果として期待していることについては、石狩では、「コミュニケーション促進」が最多83.4%を占めた。上川・留萌・宗谷では、「コミュニケーション促進」と「身体機能の向上と健康維持」が各81.0%と同比率で最多を占めた。全体では、「コミュニケーション促進」が最多82.7%を占めた。

特にコミュニケーション面での効果を期待する回答が多いものの、これに次いで「気分転換やリラックス」、「楽しみや生きがいづくり・生活の質（QOL）向上」、「身体機能の向上と健康維持」、「脳の活性化」も70%前後で僅差で多数だった。事業所では、心身の健康やQOLに関わる、さまざまな効果が期待され、レクが実施されていた（表14）。

表13 重視していること[複数回答可]

回答区分	地域区分		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	石狩 (N=145)		回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
なるべく全員が参加できる内容であること	99	68.3	49	77.8	148	71.2
利用者のADLの違いや「できる力」に合っていること	98	67.6	47	74.6	145	69.7
コストや手間に無理がなく、施設的环境に合っており、持続可能であること	91	62.8	31	49.2	122	58.7
スタッフ自身も楽しみながら実施できること	76	52.4	31	49.2	107	51.4
利用者の要望を聞き取っており、それに合っていること	66	45.5	34	54.0	100	48.1
個別援助計画に基づいていること	65	44.8	27	42.9	92	44.2
専門講師を呼ぶなど、内容に特色がありサービスの差別化につながる	8	5.5	3	4.8	11	5.3
重視していることは、特になし	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	8	5.5	3	4.8	11	5.3

注) 回答総数は、石狩511、上川・留萌・宗谷225、全体736である。

1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩3.5、上川・留萌・宗谷3.6、全体3.5である。

表14 レクの効果[複数回答可]

回答区分	地域区分		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	石狩 (N=145)		回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
コミュニケーション促進	121	83.4	51	81.0	172	82.7
気分転換やリラックス	112	77.2	48	76.2	160	76.9
楽しみや生きがいづくり・生活の質（QOL）向上	102	70.3	47	74.6	149	71.6
身体機能の向上と健康維持	95	65.5	51	81.0	146	70.2
脳の活性化	98	67.6	46	73.0	144	69.2
認知症の予防、症状緩和	82	56.6	42	66.7	124	59.6
その他	4	2.8	0	0.0	4	1.9

注) 回答総数は、石狩614、上川・留萌・宗谷285、全体899である。

1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩4.2、上川・留萌・宗谷4.5、全体4.3である。

千葉(1993)の分類による高齢者レクの効果に、上記結果をあてはめると、交流機能(「コミュニケーション促進」)、解放機能(「気分転換やリラックス」)、身体機能・精神機能(「身体機能の向上と健康維持」)、「脳の活性化」、「認知症の予防、症状緩和」、活性機能(「楽しみや生きがいづくり・QOL向上」)、がいずれも高い比率で、認識されている結果となった。

そして、レクによって期待するような効果が得られているかについては、石狩では、「得られている(46.9%)」と「少し得られている(43.4%)」が僅差で多数を占め、上川・留萌・宗谷では、「少し得られている」が最多46.0%を占めた。全体では、「得られている(43.8%)」と「少し得られている(44.2%)」が僅差で多数を占めた。両者を合計した、レクの効果への肯定的評価は全体で88.0%と高い比率が得られた(表15)。おおむね肯定評価ではあるものの、「少し」という、効果への確信の低さも垣間見られる結果となった。

表15 レクの効果が得られているか

回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
得られている	68	46.9	23	36.5	91	43.8
少し得られている	63	43.4	29	46.0	92	44.2
どちらともいえない	9	6.2	9	14.3	18	8.7
余り得られていない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
得られていない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	5	3.4	2	3.2	7	3.4
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

表16 レクは活発か

回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
活発である	71	49.0	28	44.4	99	47.6
やや活発である	42	29.0	24	38.1	66	31.7
どちらともいえない	21	14.5	8	12.7	29	13.9
余り活発ではない	5	3.4	2	3.2	7	3.4
活発ではない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	6	4.1	1	1.6	7	3.4
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

表17 レクを行う上での問題点[複数回答可]

回答区分	石狩(N=145)		上川・留萌・宗谷(N=63)		全体(N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない	50	34.5	16	25.4	66	31.7
外出の機会が少ない	42	29.0	13	20.6	55	26.4
特に問題点はない	31	21.4	19	30.2	50	24.0
他のサービスが優先されて、レクの充実化までなかなか手が回らない	24	16.6	11	17.5	35	16.8
利用者のできる力の差が大きく、レクの参加者が少ない	14	9.7	15	23.8	29	13.9
利用者の重度化がすすみ、レクの回数や時間が少ない	17	11.7	8	12.7	25	12.0
利用者の個別のレクを重視しており、集団で何かする活動は少ない	13	9.0	4	6.3	17	8.2
その他	13	9.0	2	3.2	15	7.2

注) 回答総数は、石狩204、上川・留萌・宗谷88、全体292である。

1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩1.4、上川・留萌・宗谷1.4、全体1.4である。

4) レクが活発に行われているか

レクが活発に行われているかについては、石狩(49.0%)、上川・留萌・宗谷(44.4%)とも、「活発である」が最多だった。全体でも、「活発である」が最多47.6%を占め、次いで「やや活発である(31.7%)」が多数を占めた。両者を合計した、レクの活発さへの肯定的評価は全体で79.3%と高い比率であったものの、「どちらともいえない」、「余り活発ではない」も計17.3%と比較的多数であった(表16)。

5) レクを行う上での問題点

レクを行う上での問題点については、まず「特に問題点はない」は全体で24.0%に過ぎず、これを除く約76%の事業所は、レクの実施上、なんらかの問題点を認識していた。

石狩では、「準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない」が最多34.5%を占めた。上川・留萌・宗谷では、「特に問題点はない」が最多30.2%を占め、次いで「準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない(25.4%)」と「利用者のできる力の差が大きく、レクの参加者が少ない(23.8%)」が僅差で多数だった。

全体では、「準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない」が最多31.7%を占め、次いで「外出の機会が少ない(26.4%)」が多数だった(表17)。

本調査と対象は異なるが、稲垣(2011)は、介護老人福祉施設においてレクの利用者の満足度を下げている要因を、①レクの回数が少ない、②内容が限られている、③外出の機会が少ない、④能力の差が大きく、参加できない人が多いという4点に総括した。本調査の対象事業所においては、②と③が主要な問題点であること、その背景には、準備時間や人手が足りないという、事業所の組織力や人員配置といった構造的な課題があることが明らかになった。

(3) 博物館の利用

質問紙には、高齢者による博物館の利用について回答者に具体的なイメージを提供し、理解を促すため、写真とともに図1の説明を記載した。

1) 博物館での回想法プログラム

まず、博物館での回想法プログラムを知っていたかについては、石狩 (51.0%)、上川・留萌・宗谷 (50.8%) とも、「今回初めて知った」が最多だった。全体でも、「今回初めて知った」が最多51.0%を占めた。反面、「よく知っており、回想法の目的でレクで博物館を利用したことがある」という、回想法について積極的な回答は、石狩 (6.9%)、上川・留萌・宗谷 (6.3%) において、ほぼ同比率見られた (表18)。

2) レクにおける外出の頻度

博物館への来館の前提となる、レクにおける外出の頻度については、石狩 (30.3%)、上川・留萌・宗谷 (25.4%) とも、「年に3~6回」、すなわち「2~4ヵ月に1回程度の外出機会がある」との回答が最多だった。全

体でも、「年に3~6回」が最多28.8%を占めた。一方で「月1回以上」の回答区分(「月1回」、「月に2~3回」、「1週間に1~数回」)を合計すると26.4%を占め、「年に3~6回」とほぼ同値となった。外出頻度は事業所によって差違が大きいと思われた。そして「外出機会は殆どない」は12.0%に過ぎず、これを除く90%弱の事業所は、年に1回以上の外出機会があった (表19)。

3) レクで利用したことのある博物館

レクで利用したことのある博物館について、石狩 (40.7%)、上川・留萌・宗谷 (52.4%) とも、「博物館・郷土資料館⁽⁷⁾」が最多だった。全体でも、「博物館・郷土資料館」が最多44.2%を占めた。「いずれも利用なし」は全体で32.2%で、これを除く、70%弱の事業所は博物館を利用した経験があった (表20)。

両地域の回答区分の分布には有意差が見られ ($p<0.001$)、石狩は上川・留萌・宗谷よりも「科学館」の比率が低く、「水族館」の比率が高かった ($p<0.01$) (表20)。両地域の比率の差について、「水族館」は、上川・留萌・宗谷では、所在数自体が僅少であることが回答に影響し、また「科学館」は、上川・留萌・宗谷では、人口稠密地の旭川市に所在する施設の、利用上の優位性が評価されたと思われる。

回想法の取り組み：博物館と高齢者

回想法は、過去の経験を語り合うことで、脳を活性化させ、心を元気にする手法です。認知機能やQOLへの効果が報告され、認知症の予防や進行抑制の点からも注目されています。昭和日常博物館(北名古屋市)は、「昭和」、「回想法」を活動の柱に据えています。展示室では昭和期の生活道具を見ながら、高齢者同士が、時間を忘れて思い出を語ったり、高齢者と子供達が対話する状況がよく見られます。道内でも、博物館での高齢者プログラムとして、昭和期の写真と流行歌を活用した回想法(知内町郷土資料館)、回想法を織り込んだ展示見学や茶話会(土別市朝日町郷土資料室)、動物とのふれあいから飼育経験などを思い起こす回想法(おびひろ動物園)などが行われています。北海道博物館(札幌市)の昭和期の生活道具コーナーも高齢者の皆様から人気です。入館無料や高齢者・福祉団体の利用に減免がある施設もあります。

図1 高齢者による博物館利用と回想法プログラムを説明した文章
注) 北海道博物館協会 (2015)、青柳 (2018) を参考に作成。

表18 博物館での回想法プログラム既知有無

回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
今回初めて知った	74	51.0	32	50.8	106	51.0
聞いたことはある	55	37.9	25	39.7	80	38.5
回想法の目的で利用あり	10	6.9	4	6.3	14	6.7
無回答	6	4.1	2	3.2	8	3.8
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

表19 レクにおける外出の頻度

回答区分	石狩		上川・留萌・宗谷		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
1週間に1~数回	10	6.9	1	1.6	11	5.3
月に2~3回	13	9.0	8	12.7	21	10.1
月に1回	15	10.3	8	12.7	23	11.1
年に7~11回	25	17.2	9	14.3	34	16.3
年に3~6回	44	30.3	16	25.4	60	28.8
年に1~2回	18	12.4	10	15.9	28	13.5
外出機会は殆どない	15	10.3	10	15.9	25	12.0
無回答	5	3.4	1	1.6	6	2.9
合計	145	100.0	63	100.0	208	100.0

表20 レクで利用したことのある博物館[複数回答可]

回答区分	石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
博物館・郷土資料館	59	40.7	33	52.4	92	44.2
動物園	46	31.7	18	28.6	64	30.8
植物園	26	17.9	6	9.5	32	15.4
科学館**	10	6.9	17	27.0	27	13.0
美術館	16	11.0	9	14.3	25	12.0
水族館**	21	14.5	0	0.0	21	10.1
いずれも利用なし	43	29.7	24	38.1	67	32.2

注1) 回答総数は、石狩221、上川・留萌・宗谷107、全体328である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩1.5、上川・留萌・宗谷1.7、全体1.6である。
注2) χ^2 検定により回答区分の分布は地域区分で異なる ($p<0.001$)。
注3) 残差分析により地域区分で差がある (**: $p<0.01$)。

4) 博物館利用上の問題点

a. 2地域の比較

博物館利用上の問題点について、まず、「特に問題はない」は全体で13.9%に過ぎず、これを除く約86%の事業所は、何らかの問題点を認識していた。

石狩(40.0%)、上川・留萌・宗谷(31.7%)とも、「外出範囲内に博物館がない」が最多だった。全体でも、「外出範囲内に博物館がない」が最多37.5%を占めた。次いで、「何が行われているのか情報が少ない」と「休憩場所が少なく疲れる」が同値で各27.4%と多数を占めた。

両地域の回答区分の分布には有意差が見られ($p<0.05$)、石狩は上川・留萌・宗谷よりも「見づらい展示が多い」($p<0.01$)、「高齢者が見たいと思う展示が少ない」($p<0.05$)の比率が低かった(表21)。上川・留萌・宗谷では、石狩より、展示室のユニバーサルデザインへの取り組みが遅れている、さらには、高齢者の関心を満たすような展示コンテンツが十分ではないと、回答者が捉えていると思われた。

最多であった「外出範囲内に博物館がない」という、博物館の立地や施設数に関わる問題点は、博物館の新設やハード整備が困難な昨今、早急な改善は難しい。しかし、次いで、両地域とも、「何が行われているのか情報

が少ない(石狩29.0%、上川・留萌・宗谷23.8%)」と「休憩場所が少なく疲れる(石狩30.3%、上川・留萌・宗谷20.6%)」が僅差で多数を占めた。これらは、大きな資金拠出を伴わず、比較的改善が容易な内容である。博物館には、広報活動の強化、展示導線の改善やイスの設置等によって、まずはこれらの改善に取り組むことが重要であると考えられた。

b. 高齢見学者の意向との比較

(財)日本博物館協会(2007)が調査対象とした高齢見学者(以下、見学者)は、60歳以上であるが、うち74歳以下が約70%を占めていた。すなわち、本調査で対象とした事業所の利用者と比べて、身体的にアクティブであり、既に博物館ユーザーであることから、一般高齢者と比べても博物館に関心があり、日頃から博物館の情報に触れる機会の多い個人と考えられる。

両調査は、対象(博物館利用を企画したり、レクとして活動援助したりする担当者か/利用者本人か)と選択肢が異なるため、厳密な比較は困難だが、表22に示した、以下のような傾向が見られた。

i 事業所のレク担当者(以下、レク担当者)は、見学者よりも、「情報が少ない/何が行われているのかわからない」(レク担当者27.4%、見学者19.8%)と、博物館の情報発信の不備への回答が多数であった。

ii 同様に、「休憩場所が少なく疲れる/疲れる」(レク担当者27.4%、見学者10.7%)、「バリアフリーの配慮

表21 博物館利用上の問題点[複数回答可]

回答区分	石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
外出範囲内に博物館がない	58	40.0	20	31.7	78	37.5
情報が少ない	42	29.0	15	23.8	57	27.4
休憩場所が少なく疲れる	44	30.3	13	20.6	57	27.4
入館料金が低い	38	26.2	7	11.1	45	21.6
バリアフリーの配慮が不十分	28	19.3	9	14.3	37	17.8
外出機会が少なく利用を計画しづらい	26	17.9	8	12.7	34	16.3
見づらい展示が多い**	15	10.3	14	22.2	29	13.9
特に問題はない	20	13.8	9	14.3	29	13.9
高齢者が見たいと思う展示が少ない*	13	9.0	12	19.0	25	12.0
交通が不便	20	13.8	3	4.8	23	11.1
場所がわかりづらい	7	4.8	1	1.6	8	3.8
堅苦しい、難しい	4	2.8	2	3.2	6	2.9
職員の対応がよくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	11	7.6	10	15.9	21	10.1

注1) 回答総数は、石狩326、上川・留萌・宗谷123、全体499である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩2.2、上川・留萌・宗谷2.0、全体2.2である。
注2) χ^2 検定により回答区分の分布は地域区分で異なる($p<0.05$)。
注3) 残差分析により地域区分で差がある(*: $p<0.05$ 、**: $p<0.01$)。

表22 博物館利用上の問題点[複数回答可]

回答区分	レク担当者 (N=208)		見学者 (N=867)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
情報が少ない/知らない	57	27.4	172	19.8
疲れる	57	27.4	93	10.7
入館料金が低い	45	21.6	124	14.3
バリアフリー不十分/身体的な問題	37	17.8	35	4.0
外出機会が少ない/したくない	34	16.3	7	0.8
特に問題はない	29	13.9	249	28.7
見づらい展示が多い	29	13.9	117	13.5
高齢者が見たい展示等が少ない	25	12.0	100	11.5
交通が不便	23	11.1	88	10.1
場所がわかりづらい	8	3.8	37	4.3
堅苦しい、難しい	6	2.9	35	4.0
職員の対応がよくない	0	0.0	7	0.8
その他・わからない	21	10.1	170	19.6

注1) 回答総数は、レク担当者371、見学者1234である。
1人あたりの選択肢回答数は、レク担当者1.8、見学者1.4である。
注2) 「見学者」は、60歳以上の高齢者であり実際に博物館へ来館した見学者を示す。見学者調査の結果は、(財)日本博物館協会(2007)による。
注3) 両調査で類似する選択肢を対比させた。見学者は既に来館しているため、レク担当者調査の選択肢(表21)、「外出範囲内に博物館がない」は除外した。

が不十分/身体状況から問題が多い」(レク担当者17.8%、見学者4.0%)、「外出機会が少ない/外出したくない」(レク担当者16.3%、見学者0.8%)と、主として身体面の問題や外出機会の少なさを指摘する回答が多数であった。

iii 同様に、「特に問題はない」(レク担当者13.9%、見学者28.7%)が少数であった。

以上より、主として①博物館の情報発信の不備、②身体面や外出上の課題があり、③博物館利用には問題があると多数が認識していることは、本調査で対象とした事業所の利用ならではの特徴と考えられた。

5) 博物館に行ってほしいサービス

今後、博物館に行ってほしいサービスについては、石狩では、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」、「短時間の見学でも楽しめるように、お勧めの見学ルートなどを示したパンフがほしい(以上、各47.6%)」、「車椅子を押す人員など、介助を支援してほしい(46.2%)」が僅差で多数を占めた。上川・留萌・宗谷では、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」が最多52.4%を占めた。全体では、「高

齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」が最多49.0%を占めた(表23)。

「出張型のレク」を望む回答比率の高さは、前問(表21)において「外出範囲内に博物館がない」の回答が最多であったことに関係していると考えられる。また、「介助の支援」、「お勧めの見学ルート」を望む回答が次いで多いことは、外出にあたって、介助人員や時間数が十分ではなく、博物館を利用したレクの活動援助に余裕がない事業所が多い実態を示していると思われる。

(4) 超高齢社会での博物館の役割

1) 高齢者が魅力を感じる展示

a. 2地域の比較

高齢者が魅力を感じる展示について、石狩(85.5%)、上川・留萌・宗谷(85.7%)とも、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が最多だった。全体でも、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が群を抜いて最多85.6%を占めた。次いで、「高齢者がかつて経験した自然に関するもの(51.9%)」、「さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示(47.6%)」が僅差で多数だった(表24)。

表23 行ってほしいサービス[複数回答可]

回答区分	地域区分		上川・留萌・宗谷(N=63)		全体(N=208)	
	石狩(N=145)		回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい	69	47.6	33	52.4	102	49.0
車椅子を押す人員など、介助を支援してほしい	67	46.2	26	41.3	93	44.7
短時間の見学でも楽しめるように、お勧めの見学ルートなどを示したパンフがほしい	69	47.6	22	34.9	91	43.8
体験型展示(さわれる展示物など)を増やしてほしい	60	41.4	26	41.3	86	41.3
展示見学だけでなく、博物館内で回想法や体験などのレクを提供してほしい	42	29.0	19	30.2	61	29.3
回想法など、レクに使用できる教材を高齢者施設へ貸し出してほしい	39	26.9	17	27.0	56	26.9
質問に対応したり、展示場内で解説するスタッフを増やしてほしい	22	15.2	13	20.6	35	16.8
老眼鏡や拡大鏡を貸し出してほしい	7	4.8	4	6.3	11	5.3
その他	10	6.9	3	4.8	13	6.3

注) 回答総数は、石狩385、上川・留萌・宗谷163、全体548である。

1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩2.7、上川・留萌・宗谷2.6、全体2.6である。

表24 高齢者が魅力を感じる展示[複数回答可]

回答区分	地域区分		上川・留萌・宗谷(N=63)		全体(N=208)	
	石狩(N=145)		回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
懐かしい昭和の暮らしに関するもの	124	85.5	54	85.7	178	85.6
高齢者がかつて経験した自然に関するもの	70	48.3	38	60.3	108	51.9
さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示	70	48.3	29	46.0	99	47.6
郷土の自然・歴史・文化に深く根ざしたものの	53	36.6	26	41.3	79	38.0
北海道の産業やものづくりに関するもの	29	20.0	22	34.9	51	24.5
健康維持やセラピー的な効果を意識したもの	35	24.1	14	22.2	49	23.6
高齢者のアイデアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示	31	21.4	16	25.4	47	22.6
戦争中の手紙や日記、暮らしに関するもの	30	20.7	12	19.0	42	20.2
その他	1	0.7	0	0.0	1	0.5

注) 回答総数は、石狩443、上川・留萌・宗谷211、全体654である。

1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩3.1、上川・留萌・宗谷3.3、全体3.1である。

b. 博物館職員の意向との比較

一方、道内博物館のうち、高齢者に人気の常設展示が「ある」と回答した54館の展示・サービス等の企画担当者（以下、博物館職員）に、その内容をたずねたところ、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が群を抜いて多く、最多64.8%を占めた。次いで「郷土の自然・歴史・文化に深く根ざしたもの（35.2%）」と「北海道の産業やものづくりに関するもの（29.6%）」が多数だった。

両調査の回答区分の分布には有意差が見られ（ $p<0.001$ ）、レク担当者の回答は、博物館職員よりも「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」、「高齢者がかつて経験した自然に関するもの」（以上、 $p<0.001$ ）、「さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識したもの」、「高齢者のアイデアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示」（以上、 $p<0.01$ ）の比率が高く、「その他」（ $p<0.01$ ）の比率が低かった（表25）。両調査の比率の差について、「高齢者が経験した自然」、「体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識した展示」、「参加型展示」については、博物館職員の認識が薄かったり、博物館に該当する展示が少数で、事業所のニーズに十分に答えることができていない可能性が明らかとなった。

2) 博物館が果たす役割

a. 2地域の比較

博物館が果たす役割について、石狩（67.6%）、上川・留萌・宗谷（77.8%）とも、「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場」が最多だった。全体でも、「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場」が群を抜いて最多70.7%を占めた。次いで、「癒しやくつろぎ、心の元気等を得られる場（44.2%）」「異世代交流による対話や文化伝承の場（40.9%）」が僅差で多数だった（表26）。

表25 高齢者が魅力を感じる/人気の展示[複数回答可]

回答区分	調査区分		レク担当者 (N=208)		博物館職員 (N=54)	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
懐かしい昭和の暮らしに関するもの***	178	85.6	35	64.8		
高齢者がかつて経験した自然に関するもの***	108	51.9	6	11.1		
さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示**	99	47.6	4	7.4		
郷土の自然・歴史・文化に深く根ざしたもの	79	38.0	19	35.2		
北海道の産業やものづくりに関するもの	51	24.5	16	29.6		
健康維持やセラピー的な効果を意識したもの**	49	23.6	0	0.0		
高齢者のアイデアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示**	47	22.6	1	1.9		
戦争中の手紙や日記、暮らしに関するもの	42	20.2	8	14.8		
その他**	1	0.5	9	16.7		

注1) 回答総数は、レク担当者654、博物館職員98である。
1人あたりの選択肢回答数は、レク担当者3.1、博物館職員1.8である。
注2) χ^2 検定により回答区分の分布は調査区分で異なる ($p<0.001$)。
注3) 残差分析により調査区分で差がある (** : $p<0.01$, *** : $p<0.001$)。

場」が群を抜いて最多70.7%を占めた。次いで、「癒しやくつろぎ、心の元気等を得られる場（44.2%）」「異世代交流による対話や文化伝承の場（40.9%）」が僅差で多数だった（表26）。

b. 博物館職員の意向との比較

一方、博物館職員では、高齢者が博物館に求める役割として、最多は「学習意欲を充足できる場（54.6%）」で、次いで「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場（42.6%）」、「癒しやくつろぎ、心の元気等を得られる場（41.7%）」が僅差で多数だった。

両調査の回答区分の分布には有意差が見られ（ $p<0.001$ ）、レク担当者の回答は、博物館職員よりも「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場」（ $p<0.001$ ）の比率が高く、「ボランティア活動など社会

表26 博物館が果たす役割[複数回答可]

回答区分	地域区分		石狩 (N=145)		上川・留萌・宗谷 (N=63)		全体 (N=208)	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場	98	67.6	49	77.8	147	70.7		
癒しやくつろぎ、心の元気等を得られる場	63	43.4	29	46.0	92	44.2		
異世代交流による対話や文化伝承の場	57	39.3	28	44.4	85	40.9		
共通の興味・関心を持つ仲間づくりの場	40	27.6	18	28.6	58	27.9		
ボランティア活動など社会参加の場	23	15.9	9	14.3	32	15.4		
学習意欲を充足できる場	15	10.3	4	6.3	19	9.1		
わからない	4	2.8	4	6.3	8	3.8		
その他	0	0.0	1	1.6	1	0.5		

注) 回答総数は、石狩300、上川・留萌・宗谷142、全体442である。
1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩2.1、上川・留萌・宗谷2.3、全体2.1である。

表27 博物館が果たす役割[複数回答可]

回答区分	調査区分		レク担当者 (N=208)		博物館職員 (N=108)	
	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)	回答数	比率 (%)
高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場***	147	70.7	46	42.6		
癒しやくつろぎ、心の元気等を得られる場	92	44.2	45	41.7		
異世代交流による対話や文化伝承の場	85	40.9	40	37.0		
共通の興味・関心を持つ仲間づくりの場	58	27.9	37	34.3		
ボランティア活動など社会参加の場***	32	15.4	38	35.2		
学習意欲を充足できる場***	19	9.1	59	54.6		
わからない	8	3.8	8	7.4		
その他	1	0.5	4	3.7		

注1) 回答総数は、レク担当者442、博物館職員277である。
1人あたりの選択肢回答数は、レク担当者2.1、博物館職員2.6である。
注2) χ^2 検定により回答区分の分布は調査区分で異なる ($p<0.001$)。
注3) 残差分析により調査区分で差がある (** : $p<0.01$, *** : $p<0.001$)。

参加の場」、「学習意欲を充足できる場」(以上、 $p<0.001$)の比率が低かった(表27)。両調査の比率の差について、博物館職員において「ボランティア活動など社会参加の場」と「学習意欲を充足できる場」が多い結果は、博物館職員の多くが、高齢者を「社会参加や学習の意欲の高い、元気な人々」と一様に捉えていることを示していると思われた。

4 博物館の利用と利用プログラムへの理解に影響を及ぼす属性

(1) 外的基準

博物館利用の有無(表20を変換)および、博物館利用プログラムへの理解の指標として、博物館における回想法プログラムの既知有無(表18を変換)の組み合わせから、外的基準を設定した。すなわち、データを「群1: 回想法既知で博物館利用あり」、「群2: 回想法知らず博物館利用あり」、「群3: 博物館利用なし」に3区分して外的基準とした。

(2) 説明変数の決定経緯

説明変数の決定にあたっては、アンケートの質問項目を利用して、表28に示した、以下の3系統のデータから候補を設定した。すなわち、a. 事業所の基本的属性(6項目)、b. 日頃のレク実施状況(6項目)、c. 博物館に対する要望、問題意識(4項目)の計16項目である。なお、複数回答可の項目は、「その他」と該当なし(回答数0)を除いた選択肢を、該当有無によって単数回答へ変換して、説明変数候補とした。

外的基準とこの16項目の χ^2 検定の結果は、以下の通りである。

1) 事業所の基本的属性

事業所の基本的属性について、単数回答である1~5の5変数、複数回答可の「6 回答者の職種」を5変数に

表28 数量化II類での説明変数候補一覧

系統	候補
a. 事業所の基本的属性	1 所在地域、2 設置主体、3 職員数、4 うち介護職員数、5 利用者の介護程度、6 回答者の職種* (5変数)
b. 日頃のレク実施状況	1 レクの実施上、重視していること* (7変数)、2 レクの効果* (7変数)、3 レクの効果が得られているか、4 レクは活発か、5 レクを行う上での問題点* (7変数)、6 レクにおける外出の頻度
c. 博物館に対する要望、問題意識	1 博物館利用上の問題点* (12変数)、2 今後、博物館に行ってほしいサービス* (8変数)、3 高齢者が魅力を感じる展示* (8変数)、4 博物館が果たす役割* (6変数)

注) *は複数回答可の項目を示し、単数回答に変換した。

変換し、説明変数候補は計10変数(アイテム)となった(表28)。

外的基準とこの10変数の χ^2 検定の結果、有意な関連性が認められたのは、「設置主体」($p<0.05$)のみであった(表29)。博物館の数や博物館の情報に接することが多い、大都市に立地するかどうかに関わる「所在地域」、レクの活動援助や外出レク実施上の人的要因と思われた、「職員数」、「うち介護職員数」、「利用者の介護程度」などは、有意な関連性がなかった。これらは博物館利用や利用プログラムへの理解の決め手ではないことが明らかになった。

2) 日頃のレク実施状況

日頃のレク実施状況について、単数回答である3~4、6の3変数、複数回答可の「1 レクの実施上、重視していること」、「2 レクの効果」、「5 レクを行う上での問題点」を各7変数に変換し、説明変数候補は24変数となった(表28)。

そこで、外的基準とこの24変数の χ^2 検定の結果、有意な関連性が認められたのは、「レクにおける外出の頻度」($p<0.01$)、「(レクの実施上、重視していること)コストや手間に無理がなく、施設的环境に合っており、持続可能であること」($p<0.05$)であった(表29)。

このように、上記を除く、日頃の「レクの実施上、重視していること」、「レクに期待する効果」、「レクの問題点」等に関する様々な意向は、有意な関連性がなかった。すなわち、利用者の重度化、レク準備の余裕のなさ、レ

表29 χ^2 検定の結果：有意な説明変数

系統	区分	変数	独立係数
a. 事業所の基本的属性	1 設置主体	設置主体*	0.21
b. 日頃のレク実施状況	1 レクの実施上、重視していること	コストや手間に無理がなく、施設的环境に合っており、持続可能であること*	0.20
	2 レクにおける外出の頻度	レクにおける外出の頻度**	0.37
c. 博物館に対する要望、問題意識	1 博物館利用上の問題点	特に問題はない**	0.27
		外出範囲内に博物館がない*	0.23
		外出機会が少なく利用を計画しづらい*	0.21
	2 今後、博物館に行ってほしいサービス	体験型展示を増やしてほしい**	0.27
	3 高齢者が魅力を感じる展示	北海道の産業やものづくりに関するもの*	0.20
		さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示*	0.21
	4 博物館が果たす役割	健康維持やセラピー的な効果を意識したもの*	0.21
		異世代交流による対話や文化伝承の場*	0.19

*: $p<0.05$, **: $p<0.01$

クの充実化不足といったレク活動援助上のマイナス要因、逆に、レク実施上に問題がない、レクの効果が得られている、活発であるといったプラス要因も、博物館利用や利用プログラムへの理解には、関連性がなかった。

3) 博物館に対する要望、問題意識

博物館に対する要望、問題意識について、複数回答可の「1 博物館利用上の問題点」を12変数、「2 今後、博物館に行ってほしいサービス」を8変数、「3 高齢者が魅力を感じる展示」を8変数、「4 博物館が果たす役割」を6変数に変換し、説明変数候補は34変数となった(表28)。

外的基準とこの34変数の χ^2 検定の結果、有意な関連性が認められたのは、以下の8変数であった(表29)：「(博物館利用上の問題点) 特に問題はない」、「(行ってほしいサービス) 体験型展示を増やしてほしい」(以上、 $p<0.01$)、「(博物館利用上の問題点) 外出範囲内に博物館がない」、「(博物館利用上の問題点) 外出機会が少なく利用を計画しづらい」、「(高齢者が魅力を感じる展示) 北海道の産業やものづくりに関するもの」、「(高齢者が魅力を感じる展示) さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示」、「(高齢者が魅力を感じる展示) 健康維持やセラピー的な効果を意識したもの」、「(博物館が果たす役割) 異世代交流による対話や文化伝承の場」(以上、 $p<0.05$)

そして、項目間の関連性から説明変数をさらに絞り込むため、表29の11項目相互の独立係数を算定した。その結果、「レクにおける外出の頻度」と「外出機会が少なく利用を計画しづらい」(独立係数0.645)に独立係数0.5を上回る高い関連が見られた。そこで、前者(p 値0.000)と比べて外的基準への影響が低い、「外出機会が少なく利用を計画しづらい」(p 値0.010)を候補から除外した。こうして説明変数10項目を決定した。

(3) 数量化Ⅱ類の分析

(2) から得られた10変数をアイテム、外的基準を「群1：回想法既知で博物館利用あり(N=64)」、「群2：回想法知らず博物館利用あり(N=52)」、「群3：博物館利用なし(N=56)」の3区分、分析対象をN=172として、数量化Ⅱ類を行った。なお、このデータにて、外的基準と10アイテムの χ^2 検定をした結果、表29と同様の有意水準にて、10アイテム全てに有意な関連性が見られた。

1) 外的基準への影響の大きいアイテム

数量化Ⅱ類の分析の結果、外的基準への影響の大きさを示す、レンジと偏相関係数を示した表30を見ると、

「博物館利用なし」(群3)と「それ以外」(群1~群2)、すなわち、「博物館の利用なし/あり」を分ける第1軸では、「レクにおける外出の頻度」(レンジ2.53、偏相関係数0.405)が突出して大きく、続いて「設置主体」(レンジ0.74、偏相関係数0.115)、「外出範囲内に博物館がない」(レンジ0.57、偏相関係数0.186)、「(博物館の利用に)特に問題はない」(レンジ0.51、偏相関係数0.131)などの影響が大きかった。

次に、「回想法既知で博物館利用あり」(群1)と「回想法知らず博物館利用あり」(群2)、すなわち、「博物館利用プログラムへの理解のあり/なし」を分ける、第2軸では、「レクにおける外出の頻度」(レンジ2.66、偏相関係数0.239)、「設置主体」(レンジ2.21、偏相関係数0.288)、「(博物館の利用に)特に問題はない」(レンジ1.22、偏相関係数0.183)などの影響が大きかった。

このように、博物館利用がそもそも実現可能かどうかの基礎的な条件を示す「レクにおける外出の頻度」は、「博物館の利用に特に問題点がない」と満足を感じていること、「健康維持やセラピー的な効果」、「体験型展示」といった、展示や教材面での要望以上に、双方の軸に特に大きな影響を与えていた。

2) 外的基準への影響力の大きいカテゴリ

外的基準への影響力の大きいカテゴリを図2に示した。

まず、「回想法既知で博物館利用あり」とした群1(図の第Ⅱ象限)では、「1週間に1回以上、外出するレクがある」、「博物館の利用に問題なし」の2者の影響が顕著に大きかった。高齢者が魅力を感じる展示では、「産業・ものづくりの展示」、「体験型展示」の影響も高かった。すなわち、群1の特徴として、「日頃から外出レクの機会が頻繁にあり、博物館利用の満足度が相対的に高い層」であることがあげられた。

次に「回想法知らず博物館利用あり」とした群2(図

表30 博物館の利用とプログラムへの理解に対する影響

アイテム	第1軸		第2軸	
	レンジ	偏相関係数	レンジ	偏相関係数
外出の頻度	2.53	0.405	2.66	0.239
設置主体	0.74	0.115	2.21	0.288
範囲内に博物館なし	0.57	0.186	0.04	0.009
特に問題はない	0.51	0.131	1.22	0.183
セラピー的な効果	0.46	0.142	0.27	0.051
レクが持続可能	0.43	0.153	0.50	0.109
異世代交流	0.40	0.146	0.19	0.041
体験型展示	0.37	0.123	0.15	0.029
体験型展示を増やす	0.36	0.120	0.39	0.078
産業・ものづくりの展示	0.25	0.078	0.10	0.018

注) 第1軸は博物館の利用有無、第2軸は博物館利用プログラムへの理解有無を分ける。

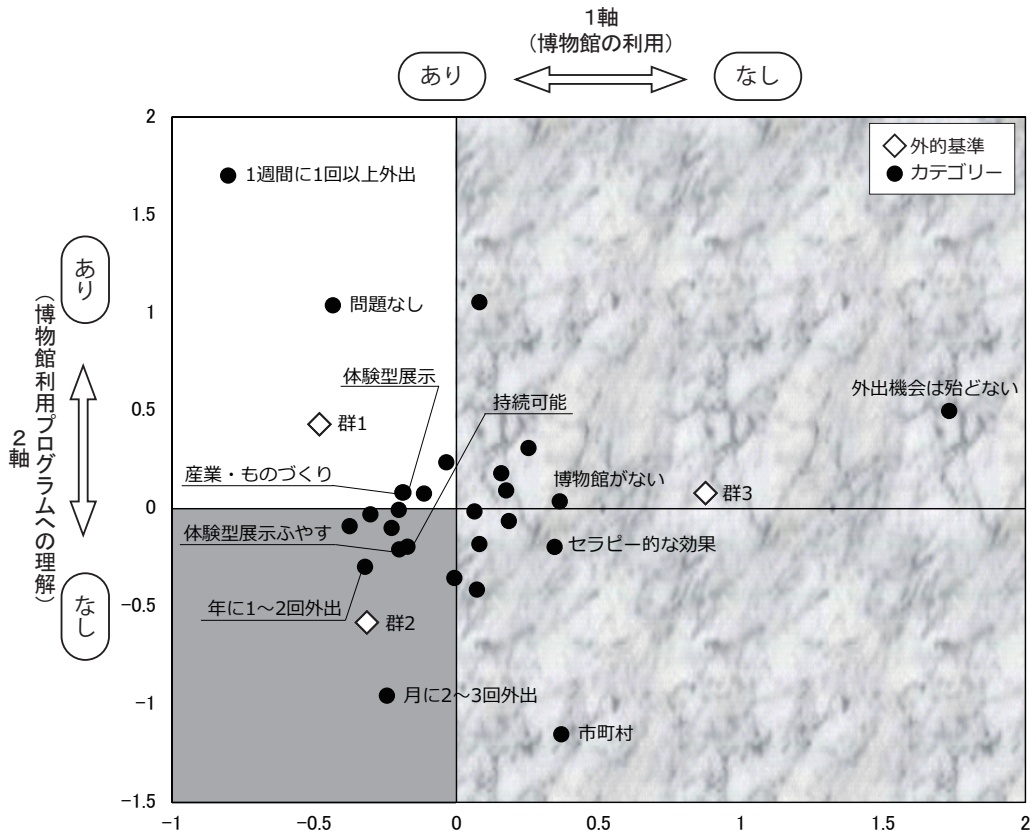


図2 博物館の利用と利用プログラムへの理解に影響を与えるカテゴリー

注1) 数量化Ⅱ類による分析 (判別率 65.3%)。各象限外縁部のカテゴリーほど、外的基準への影響が大きく、ラベルを記載した。

注2) 群1：回想法既知で博物館利用あり (N=64)、群2：回想法知らず博物館利用あり (N=52)、群3：博物館利用なし (N=56)。網掛けなしは群1、網掛け左部は群2、網掛け右部は群3に関連の深い象限を示す。

の第Ⅲ象限)では、「月に2~3回外出するレクがある」が特に大きく、次いで「年に1~2回外出するレクがある」、「(行って欲しいサービス) 体験型展示を増やしてほしい」、「(レクの実施上、重視していること) コストや手間に無理がなく、施設的环境に合っており、持続可能であること」の影響が大きかった。

頻度の低い「年に1~2回外出するレクがある」の影響が大きかったことは、レクにおける外出の頻度が高いことが、博物館利用に直結するわけではないことを示している。そして、体験型展示の増設という明確な要望を持ち、レクの持続可能性を重視していることから、回想法については知らなかったものの、利用にその他のメリットや合理性が認められれば、外出頻度の低い事業所であっても、博物館を利用することが明らかになった。すなわち、群2の特徴として、後述する群3と比較して、「博物館の展示に具体的な要望を持っている層」であり、持続的に博物館を利用できる条件にあって、外出頻度が必ずしも多くはない場合においても、「博物館の利用を優先できる」姿勢が見出された。

最後に「博物館利用なし」とした群3 (図の第Ⅰ・Ⅳ象限) は、「外出機会はほとんどない」の影響が群を抜

いて大きく、次いで、「外出範囲内に博物館がない」、「(高齢者が魅力を感じる展示として) 健康維持やセラピー的な効果を意識したものの」、「(設置主体が) 市町村」の影響が大きかった。すなわち、群3の特徴として、外出機会が僅少で、外出範囲内に博物館がないという、「博物館への物理的なアクセスが困難な層」と考えられた。しかし、「健康維持やセラピー的な効果を意識したものの」の影響が大きかったことは、群3が、要望に具体性は欠けるものの、「博物館利用に対する期待や潜在的なニーズを持っている層」であることを示していると思われる。この結果は、群3に今後、来館という方法以外で、博物館のサービスを利用してもらえる可能性を示している。

5 まとめ

(1) 北海道博物館の高齢者利用

まず、2017年度の北海道博物館総合展示入場者数において、高齢者は14.0%を占め、一般 (33.8%)、小学生 (21.0%) に次ぐ主要な入場者層の1つであった (表2)。

次に、2017年度の同館総合展示への入場団体数において、高齢者団体は24.8%を占め、学校団体(34.4%)に次いで多数だった。さらに、この入場団体数において、「高齢者主体の一般団体による利用」と「高齢者施設による利用」との比率は概ね4:6となり、後者が前者を上回っていた(表3)。老人デイサービスセンターの入場数は、福祉団体の25.2%、高齢者団体の32.5%を占め、福祉団体および高齢者団体において最多の主体だった。

(2) 事業所の基本的属性

アンケート調査の結果では、事業所の所在地域は「札幌市」が約50%を占め(表4)、設置主体は「株式会社」が最多40%弱だった(表5)。職員数(常勤換算人数)は、「4~5人未満」、「6~7人未満」、「8~9人未満」、「10~15人未満」が10%強で多数だった(表6)。職員数のうち、介護職員数(常勤換算人数)は、「4~5人未満」と「3~4人未満」が16~17%と多数だった(表7)。利用者の年齢は「75歳以上が多い」が90%弱だった(表8)。利用者の介護程度は、「要介護1~2が多い」が約60%と多数だった(表9)。回答者(事業所のレク担当者)の職種は、「生活相談員」が最多約50%だった。石狩は上川・留萌・宗谷よりも「看護職員」の比率が少なく、管理者を中心とする「その他」の比率が多数だった(表10)。回答者のレクでの役割は、「企画」が70%超で、次いで「実施上の観察」、「プログラムの運営・進行」も約60~70%と多数だったが、「プログラムの評価」は40%未満に留まった(表11)。

(3) レクについて

レクの内容は、「体操・ストレッチ」、「事業所内の年中行事」、「大人のぬり絵」、「クイズ・言葉遊び」が70%以上を占め、事業所で一般的に実施されるとともに、「博物館などの見学」も30%弱を占めた(表12)。レクで重視していることは、「なるべく全員が参加できる内容であること」、「利用者のADLの違いや『できる力』に合っていること」が多数で各約70%を占めた(表13)。レクの効果は、「コミュニケーション促進」をはじめ、交流、解放、身体、精神、活性の5機能にまたがる、多岐にわたる内容が各約60~80%と高く期待されていた(表14)。レクの効果の獲得については90%弱(表15)、活発さについては80%弱(表16)の肯定評価が見られた。レクを行う上での問題点は、「準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない」と「外出の機会が少ない」が各約30%と多数だった(表17)。

上記については、石狩、上川・留萌・宗谷にて有意差はなく、回答傾向は2地域共通であった。

(4) 博物館の利用

博物館における回想法プログラムは、「今回初めて知った」が約50%だった(表18)。レクにおける外出の頻度は、「年に3~6回」が30%弱を占めた(表19)。70%弱の事業所は博物館を利用した経験があり、施設種別では「博物館・郷土資料館」が約40%と多数だった。石狩は上川・留萌・宗谷よりも「科学館」の比率が低く、「水族館」の比率が高かった(表20)。博物館の利用上の問題点は、「外出範囲内に博物館がない」が最多約38%で、次いで「何が行われているのか情報が少ない」、「休憩場所が少なく疲れる」が各30%弱と多数だった。石狩は上川・留萌・宗谷よりも「見づらい展示が多い」、「高齢者が見たいと思う展示が少ない」の比率が低かった(表21)。見学者との比較では、事業所のレク担当者は、見学者よりも、博物館の情報発信の不備、バリアフリーの不十分さや外出機会の少なさ等を多数が指摘し、博物館利用には問題点があると多数が認識している傾向があった(表22)。今後、博物館に行ってほしいサービスは、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」が50%弱と最多だった(表23)。

(5) 超高齢社会での博物館の役割

高齢者が魅力を感じる展示は、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が群を抜き約86%だった(表24)。博物館職員との比較では、事業所のレク担当者は、博物館職員よりも、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」、「高齢者がかつて経験した自然に関するもの」、「さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識したもの」、「高齢者のアイデアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示」の比率が有意に高かった(表25)。

博物館が果たす役割は、「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場」が群を抜いて最多約70%だった(表26)。博物館職員との比較では、事業所のレク担当者は、博物館職員よりも、「高齢者の経験が盛り込まれた、懐かしさの体験の場」の比率が高く、「ボランティア活動など社会参加の場」、「学習意欲を充足できる場」の比率が有意に低かった(表27)。

(6) 博物館の利用と利用プログラムへの理解に影響を及ぼす属性

数量化Ⅱ類による解析の結果、「博物館の利用有無」を分ける第1軸では、「レクにおける外出の頻度」が突出して影響が大きかった。「博物館利用プログラムへの理解有無」を分ける第2軸では、同様に「レクにおける外出の頻度」のほか、「設置主体」、「(博物館の利用に)特に問題はない」などの影響が大きかった(表30)。

外的基準への影響力の大きいカテゴリー (図2) より、まず、「回想法既知で博物館利用あり」とした群1の特徴は、「日頃から外出レクの機会が頻繁にあり、博物館利用の満足度が相対的に高い層」であった。次に「回想法知らず博物館利用あり」とした群2の特徴は、群3と比較して、「博物館の展示に具体的な要望を持っている層」であり、持続的に博物館を利用できる条件にあって、外出頻度が必ずしも多くはない場合においても、「博物館の利用を優先できる」ことであった。最後に「博物館利用なし」とした群3の特徴は、外出機会が少なく、外出範囲内に博物館がないという、「博物館への物理的なアクセスが困難な層」であった。

6 考察と今後の課題

本研究で明らかにできた、事業所の日頃のレクの実施状況、博物館の利用状況とその評価、高齢見学者および博物館職員の意向との比較から、以下の課題が指摘できる。

(1) レクの担い手の不足と活動援助の余裕のなさ

まず、多くの事業所では、生活相談員がレクの主担当となり (表10)、レクの企画を始めとする主要な役割を担っていた (表11)。生活相談員の中心的な業務は、利用者の生活向上のための相談・援助である。さらに事業所職員のリーダー的存在として「通所介護計画書」作成なども担う (浅岡 2015)。しかし、規模の小さい事業所では、生活相談員が管理者や介護職員を兼務し、事業所運営の管理業務やケア業務 (入浴、食事、排泄、レクなど) を担当することが多いと指摘されている (浅岡 2015)。

レク担当者として、生活相談員が最多を占めた結果は、以下の2つの解釈が考えられる。まず、相談業務から得た利用者の個々の状況を踏まえ、「利用者の介護を改善する」という、生活相談員ならではの高次の視点とリーダーシップによって、レクの活動援助のチームワークが機能している可能性である。一方で、本来、レクを含むケア業務を主担当する介護職員のみでは、レクの活動援助を十分に実施できない、厳しい実情があることである。後者は、レクの問題点として、「準備時間や人手が足りず、レクの種類が少ない」と、屋内レクの実施と比べて、活動援助に多数の専任スタッフの配置が必要となると思われる「外出の機会が少ない」が約30%と多数だったこと (表17) からも裏付けられる。

(2) 70%弱が博物館を利用している反面、問題を感じる事業所が多い

本研究では、70%弱の事業所が博物館を利用したことがあることが明らかになった (表20)。この比率の高さは注目されるものであり、今後、事業所を始めとする、高齢者施設の博物館利用の拡大を予想させる。

高齢者のデイサービス (通所介護)・デイケア (通所リハビリテーション) で行われるレクの目的は、利用者の身体的・精神的能力を維持することであり、その効果は、一般的には、廃用症候群⁽⁸⁾の進行で起こる寝たきりや認知症を予防すること等があげられる (干場 2010)。

さらに近年、既述のように「幸福の追求」に着眼する福祉レク (川廷 2003)、「生活の活性化」に着眼するアクティビティ・ケア (奥野・大西 2010) の概念の普及もあり、機能訓練の目的で行われるレクにおいても、従来のADLの向上と改善のみに力点を置いたサービス内容から、QOLを念頭におき、多様な効果を狙ったサービスへと移行させる重要性を、事業所が認識していると考えられる。

加えて、本アンケート調査は、約半数の回答者にとって、博物館での回想法プログラムについて初めて知る (表18) 機会となり、博物館利用のイメージアップと回想法プログラムの普及に一定の役割を果たすことができた。博物館関係者の尽力により、回想法という切り口から、認知機能等への良い効果や懐かしさの体験を提供できることを、実践とともに継続して普及できれば、今後、事業所の博物館利用がさらに増えていく可能性がある。

しかしながら、博物館側の立地、情報発信の不備、バリアフリーの不十分さ、事業所側の外出機会の少なさ等が、主要な問題点となり (表21)、現状の事業所による博物館の利用環境は、必ずしも満足いく状況ではないことが明らかになった。高齢見学者との比較では、事業所のレク担当者は、これら項目をより多数が指摘する傾向がみられた (表22)。博物館が高齢者施設の利用者を受け入れるにあたって、これらは優先的に対応が求められる課題と考えられた。

(3) 事業所のレク担当者と博物館職員との意識の差異

本研究では、博物館の展示や役割について、事業所のレク担当者と博物館職員との意識に大きな乖離が見られた (表25・27)。高齢者が魅力を感じる展示であると回答された、「高齢者がかつて経験した自然」、「体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識した展示」、「参加型展示」 (表25) については、博物館職員の認識が薄かったり、該当する展示が少数で、事業所のニーズに十分に答えることができていない可能性が明らかと

なった。さらに博物館が果たす役割としては、「ボランティア活動など社会参加の場」、「学習意欲を充足できる場」は、博物館職員が認識するほどには、レク担当者に支持されておらず、事業所が持つ実際のニーズとのすれ違いが見られた(表27)。

この理由として、既述のように博物館職員の多くが、高齢者を「社会参加や学習の意欲の高い、元気な人々」と一様に捉え、いわゆるアクティブシニアを、展示をはじめとする博物館活動のターゲットとしてきたことが考えられる。博物館は、福祉や介護のサービスの利用者である高齢者の存在を再認識し、上記のような高齢者施設のニーズと今後の社会変化とを十分に勘案し、自らの活動使命、ターゲットについて、今一度、組織内で議論し、常設展示の入れ替え、企画展示、教育普及事業などの博物館活動を展開することが重要である。

(4) 事業所による博物館利用の促進方策

本研究では、博物館利用に対して異なる層の特徴を明らかにできた(4-(3)-2))。下記はこの知見をベースに、異なる層(群)別に、博物館が事業所による利用を促進させ、また利用環境を改善させる方策について記述したい。

1) 「群1：回想法既知で博物館利用あり」に対する利用促進策

まず「群1：回想法既知で博物館利用あり」に対しては、日頃から外出レクの機会が頻繁にある(図2)ことから、現状では不足が指摘された情報発信(表21~22)を強化して、展示替えや新しい企画展等の広報活動を継続的に実施して、来館のリピートを促すことである。さらには、「産業・ものづくりの展示」、「体験型展示」(図2)といった具体的な嗜好を持っていることから、例えば、視覚・聴覚で楽しめる映像資料を展示室に設置したり、農林水産業・炭鉱業や職人の道具といった実物資料を活用したハンズオン、ハッカや樹木などの香りの体験などを、展示観覧と合わせて提供することが考えられる。

また群1は、回想法について理解しており、博物館利用プログラムへの意識が高い層である。博物館職員とこの群に属す事業所職員とが連携し、展示室を活用した回想法を、協働して実施できる可能性もある。

高齢者施設の利用者の受け入れには、博物館には、バリアフリー(表21~22)等のハード整備が重要となる。彼らの利用環境を改善するためには、群1に属す事業所との継続的な関係形成の中で、自施設において優先的に整備すべき部分や、バリアを軽減するための介助(表23)のあり方といった具体的な情報を聞き取って、博

物館側がノウハウを蓄積することが有効と考えられる。

2) 「群2：回想法知らず博物館利用あり」に対する利用促進策

次に「群2：回想法知らず博物館利用あり」は、外出機会が必ずしも多くはない条件下にあっても、博物館の利用を優先してくれる(図2)、博物館側にとって貴重な層である。この群に対しては、群1と同様の方法で、大きな設備投資を伴わない工夫もしながら、「体験型展示を増やす」(図2)ことで要望を受けとめるほか、展示室を活用した回想法プログラムの実施について、その効果やメリットを伝達しながら、博物館側から積極的に提案してみることも有効であろう。

3) 「群3：博物館利用なし」に対する利用促進策

最後に「群3：博物館利用なし」は、博物館への物理的なアクセスが困難な層(図2)である。そこで、行って欲しいサービスとして挙げられた「高齢者施設を訪問しての出張型のレク」(表23)などアウトリーチの充実が、この群の博物館利用を実現させるために有効と考えられる。人員の限られる地域博物館の職員にとっては、出張型のレクの提供は、プログラム・教材開発、相手方との調整など、コストや手間のかかることであるが、地域社会への新たな役割発揮を実現させる手法の一つとなり得るだろう。

4) 全群に共通する課題として博物館が心がけること

利用促進にあたって、全群に共通する課題(図2では各群の特徴として現れないが、表21~27において比率の高い項目)として、特筆すべきことに、超高齢社会において博物館が果たす役割について、「懐かしさの体験の場」が博物館職員の比率を大きく上回り、約70%と圧倒的多数であったことがあげられる(表27)。

この実現には、既述のように高齢者というターゲットの多様性に配慮し、今後は「懐かしさ」、「癒し」、「くつろぎ」(表27)といったキーワードで、高齢者がしみじみと楽しめる展示空間づくりに務めることが重要であろう。具体的には、昭和期のくらしや生活用具等をテーマとする体験型を含む展示(表25・27)、休憩場所の増設(表21~22)、限られた利用時間内で高齢者に人気の展示エリアへ誘導できるルートマップ等のパンフレット(表23)の提供、こうしたルートマップを補助する展示室内のサインや誘導サービスの充実も有効と考えられる。

北海道の今後の大幅な人口減と高齢化の進行は、集落の消滅や地方都市の衰退をも懸念させる。博物館には、以上の知見も参考に、自分たちの施設の強みは何か、どうしたら今後地域社会で生き残れるのかを勘案した上で、

主体的に方策を選び取る姿勢が求められている。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、石狩、上川・留萌・宗谷管内の老人デイサービスセンターの皆様、北海道保健福祉部高齢者保健福祉課 主幹 山谷信夫氏、同保健福祉部施設運営指導課、士別市いきいき健康センター、昭和日常博物館（北名古屋歴史民俗資料館）、朝日町郷土資料室の皆様、早坂有美氏に大変お世話になりました。本研究は、JSPS科研費18K01108の助成を受けたものです。深くお礼申し上げます。

注

- (1) 博物館・郷土資料館等に、美術館、科学館、動物園、植物園、水族館を含む。特に記載がない限り、以下同じ。
- (2) 老人デイサービスセンター等の利用者である、要支援該当者、基本チェックリスト該当者を含む。
- (3) 認知症高齢者の行動変化の背景にある行動・心理症状。例えば、抑うつや不安、徘徊、物盗られ妄想など(野村 2011b)。
- (4) 都道府県による推計を集約した厚生労働省(2019)によると、介護人材の需要は、2020年度末に約216万人、2025年度末には約245万人となる。しかし、2016年度現在の介護人材は約190万人であり、需要に対して、約26万人(2020年度末)、約55万人(2025年度末)の不足がある。さらに全国の介護保険サービスを実施する事業所へのアンケート調査結果((公財)介護労働安定センター 2018)によると、介護サービスに従事する従業員数に不足感を持つ事業所は、2017年度現在で66.6%を占め、2013年度より4年連続して比率が増加している。
- (5) 利用定員が19人未満の小規模な事業所を指す。通所介護事業所が都道府県の指定であるのに対し、地域密着型通所介護事業所の指定は市町村である(北海道保健福祉部業務資料)。
- (6) 有効回答の内訳は、石狩では、通所介護事業所71、地域密着型通所介護事業所74、上川・留萌・宗谷では、同事業所32、同事業所31であった。
- (7) 美術館、科学館、動物園、植物園、水族館を除く、狭義の総合・歴史系・自然史系博物館、およびその小規模館を指す。以下同じ。
- (8) 長期臥床や関節の固定等により身体の活動性が制限されて起きる症状。例えば感覚障害や筋力低下、皮膚の萎縮や褥瘡、食欲減退や便秘など(廣池 2003)。

引用文献

- 青柳かつら 2016. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発: 2015年北海道と2003年全国の博物館園対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から. 北海道博物館研究紀要, 1: 87-102.
- 青柳かつら 2018. JSPS科研費15K01153報告書1. 博物館を拠点とした高齢者と協働する地域学習プログラム集. 北海道博物館. <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/news/detail9281/> (2019年12月17日アクセス)
- 浅岡雅子 2015. 現場で使える デイサービス生活相談員便利帖.

- 翔泳社.
- 千葉和夫 1993. 高齢者レクリエーションの基礎的理解. 福祉文化学会(監修). 高齢者のレクリエーションのすすめ, pp. 11-61. 中央法規出版.
- 原田秀子・堤雅恵・澄川桂子・涌井忠昭・小林敏生 2008. 要介護高齢者を対象としたアクティビティケアにおける担当職種の見込み役割分担の検討. 山口県立大学看護栄養学部紀要, 1: 43-49.
- 廣池利邦 2003. 第5章レクリエーション活動援助計画. 川廷宗之・廣池利邦・大場敏治(編). 新版レクリエーション援助法, pp. 151-183. 健帛社.
- 北海道デイサービスセンター協議会 2017. デイサービスの運営とサービス向上を考える: デイサービスセンター基礎調査結果から考える. 北海道デイサービスセンター協議会.
- 北海道博物館協会 2015. 研究大会テーマ「高齢社会の中でミュージアムにできること」. 北海道博物館大会資料, pp. 7-12. 北海道博物館協会.
- 北海道保健福祉部高齢者支援局高齢者保健福祉課 2019. 北海道の高齢者人口の状況. <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/khf/koureishajinkou.htm> (2019年12月17日アクセス)
- 干場真澄美 2010. Q19レクリエーション. 日本デイケア学会(編). 高齢者デイサービス・デイケアQ&A, pp. 58-59. 中央法規出版.
- 稲垣貴彦 2011. 介護老人福祉施設におけるレクリエーション活動についての実態調査. 中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要12: 129-138.
- 川廷宗之 2003. 第1章レクリエーション活動の意義. 川廷宗之・廣池利邦・大場敏治(編). 新版レクリエーション援助法, pp. 1-43. 健帛社.
- 北名古屋市(編) 2013. 高齢者の居場所づくりと役割づくり. 北名古屋市.
- 滝口 真 2007. 第6章レクリエーション援助者の役割. レクリエーション援助者の具体的業務. 福祉士養成講座編集委員会(編). レクリエーション活動援助法, pp. 138-148. 中央法規出版.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2018. II. 都道府県別にみた推計結果の概要. 日本の地域別将来推計人口: 平成27(2015)～57(2045)年(平成30年推計), pp.45-73. 国立社会保障・人口問題研究所. http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson18/6houkoku/houkoku_3.pdf (2019年12月17日アクセス)
- (公財)介護労働安定センター 2018. 事業所における介護労働実態調査. http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/h29_chousa_kekka.pdf (2020年1月30日アクセス)
- 厚生労働省 2019. 第7期介護保険事業計画に基づく介護人材の必要数について. 福祉・介護人材確保対策について. <https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000549665.pdf> (2020年1月30日アクセス)
- 黒白恵子 2014. 介護老人福祉施設と介護老人保健施設におけるアクティビティケアの看護職の役割と学習の認識. 日本看護科学会誌 34-1: 142-149.
- 森山千賀子・土井晶子 2009. 日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題: QOLの向上に効果的な余暇活動とは. 白梅学園大学・短期大学紀要, 45: 49-67.
- 内閣府 2019a. 令和元年版高齢社会白書(全体版). 第1章 高齢化の状況. 第2節 高齢期の暮らしの動向. 2 健康・福祉. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s2s_02_01.pdf (2019年12月17日アクセス)

内閣府 2019b. 令和元年版高齢社会白書(全体版). 第1章 高齢化の状況. 第1節 高齢化の状況. 1 高齢化の現状と将来像. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf(2020年1月30日アクセス)

野村豊子 2011a. 健康な高齢者を対象とした回想法にはどのような効果が考えられますか. 野村豊子(編). Q&Aでわかる回想法ハンドブック. pp. 180-181. 中央法規出版.

野村豊子 2011b. 回想法はどのような人を対象に何をしますか. 野村豊子(編). Q&Aでわかる回想法ハンドブック. pp. 2-3. 中央法規出版.

奥村由美子 2011. 認知症を有する高齢者にとって回想法にはどのような効果がありますか. Q&Aでわかる回想法ハンドブック. pp. 178-179. 中央法規出版.

奥野茂代・大西和子 2010. 老年看護学. ニューヴェルヒロカワ.

照井孫久・今井幸充・渡邊光子・野村豊子. 2006. 高齢者施設におけるアクティビティの実態. 老年精神医学雑誌17-11: 1199-1207.

(財)日本博物館協会 2007. 6. 添付資料. 誰にもやさしい博物館づくり事業: 高齢者プログラム. pp. [付2]1-17. (財)日本博物館協会.

Development of Innovative Regional Education Contents for the Wellbeing of an Aging Society 2:

Analysis of Questionnaires regarding Recreation at Elderly Day Service Centers and Museums in Hokkaido

AOYAGI Katsura

With the goal of clarifying issues regarding recreation at senior citizen facilities and use of museums, we have carried out a questionnaire for staff in charge of recreation at elderly day service centers throughout Hokkaido. Our study examined questionnaire response data as follows: 1) comparison of responses between recreation staff of two regions, 'Ishikari' and 'Kamikawa / Rumoi / Soya'; 2) comparison of responses between recreation staff and senior citizen museum visitors; 3) comparison of responses between recreation staff and museum staff; 4) analysis of data via Hayashi's Quantification Method Type II. Our findings were that due to lack of recreation staff at these centers, there was little opportunity for recreation activities. Slightly less than 70% used museums, however, there were a number of challenges: lack of museums in excursion range, lack of available information about museums, and lack of rest areas within the museums. In 1), there was very little difference between the two regions. In 2), the number of re-

sponses from recreation staff identifying issues — lack of publicized museum information, lack of barrier-free facilities, and few excursions by senior citizens — was greater than the number of such responses from senior citizen museum visitors. In 3), recreation staff were more likely than museum staff to respond that senior citizen visitors have needs for nostalgic contents, such as exhibits about life during the Showa era and nature. In 4), to resolve these issues, museums should undertake specific measures depending on the user market segment. For the segment of museum users who visit for reminiscence purposes, the museums should increase publicity and seek advice on barrier-free facilities. For the segment of museum users who do not visit for reminiscence purposes, the museums should increase interactive exhibits. For the segment which did not visit museums, the museums should offer mobile recreation-oriented programs which are capable of directly visiting senior citizens.